

Try & Challenge

新しい選挙と政治参加の源は生活から湧き上がる

私は日常の生活の中から「越谷市をどうしたいのか」がハッキリと決まっていたため、従来とは全く違った選挙を迎えました。今回、誰かを応援するのが選挙だという感覚は、私にはありません。越谷の将来像や政策を提示して選んでもらう事に集中していました。

越谷の YES, WE CAN.

この様に選挙に向き合うと、埼玉政経セミナーの統一マニフェストは非常に的を得たものでした。勉強会・検討会・一斉アンケート・発表会と、徹底した市民参加で作りに上げた市民主導のマニフェストには他にない提案力があり、私一人でも街頭配布を行う事が出来るものでした。候補者でもない市民が一人駅前

で政策を提案するなんて初めての取り組みでしたが、市民でもこんなアプローチの方法があったんだと、改めて自賛しています。
セミナーのメンバーを見ても、「選挙にどの様に取り組むのか」ではなく「選挙でどの様に表現するか」という自身の思いを抱えた、自立的な候補者や支援者が現れ、誰が候補者なのか分からない大変面白い物でした。「政治を任せるための一票」という概念はもう古いのではないかと。

子育て世代の考え方に、本来の二元代表制を有効に機能させ、議会も未来も自分達の手で決定していく

という強い意志を感じます。

今回の選挙のような、議会を市民と議員と一緒に担う新しい取り組みに「皆さんも一票を！」

(埼玉政経セミナー運営委員 岡田)

「統一地方選」を顧みて

今回の統一地方選は、前半の県議選、後半の市議選いずれも30%台という低投票率で終わった。特に県議選では全国平均を大きく下回り、埼玉県はワースト2位であった。救いは市議選の38.99%で前回比0.77%に止まり、選挙戦後半の盛り上がりを支えた。

しかし各候補者から発信される声は、必ずしも投票行動を促すものではなく、自らの投票を願うという相変わらずの身勝手さでしかなかった。現職は4年間の活動で、有権者と向き合ってきたこと、これからの4年間で何をしたいのかの政策を軸に訴えるわけだが、今回の選挙で市民は正しい選択をしたのであろうか。また市民が有する権利行使を行ったといえるのであろうか。

10人に6人の人が投票所に行かなかったことは、市民側の責任を果たしたとは言えないし、将来の越谷への意思表示をしなかったことの役割の放棄は、残念でなりません。候補者側の発信力に課



題があるとしても、越谷市政が世の中の動きと連動していないとしても、越谷が目指す将来の姿を示しているのは誰か、を決めるリーダー選びに参加しない理由にはならないと思います。議員・議会の機能不全や市民参加システムの不十分さを指摘する前に、まずは襟を正さなければならなかったのは、私たち市民ではなかったかを噛みしめようではありませんか。
(大竹在住 西川孝一)

統一地方選に思う

私が辻こうじを囲む会の代表を務めたなかで一番力を入れたのは、市内で頑張る若者によるトークライブでした。

現在、昭和30・40年代に建設された公共施設の建替え、改築、現状維持の選択を迫られています。そして老朽化したのは箱物であるハード面だけではなく、政策であるソフト面も然りです。何らかの見直しが必要ですが、もちろん法隆寺の様に千年の時を経て残すべき政策もあります。

当初、社会起業家の若者達は新たなソフトかと想像していましたが残り続けなくてはならない価値観を持つ人たちでした。

登壇した3名のパネラーは、教育・女性支援・貧困問題に携わる方々で、各分野からは「公的施設以外の世の中も広く教育の場であること、それについての投資を意義あるものとする」と「若い世代が子育ての場面などで新しい文化や技術を取り入れる事を年長世代に理解してほしい」「強者が弱者を排除するのではなく、富める者が貧困について配慮出来る世の中を目指したい」等の提案がなされ、有意義な時間であったと考えています。

(越谷在住 辻純志郎)

子育て世代の「参加型選挙」

私の所属する地域政党「越谷市民ネットワーク」は、毎回カンパとボランティアの手作り選挙を行ってきましたが、今回私が立候補するにあたり、多くの子育て世代の仲間が参加してくれました。お互い子ども達の面倒を見ながら、駅頭では候補者も運動員も関係なくマイクを握り、放射能対策や予防接種、給食などについて母親たちの思いを語り、最終日には誰が候補者かわからないほど盛り上がりました。選挙を通して、参加した仲間たちが一緒に成長し、さらに「わたしたちのまちはわたしたちが責任を持って決める」という自治への意識が芽生え、子育て世代の意識の底上げに繋がったと思います。

そしてこれからも、常に子育て世代の仲間たちと連携して活動していきたいと考えています。子連れでも傍聴しやすいしくみなど子育て世代のアイデアを議会改革にどんどん取り入れて、子育て世代が議会に参加することに楽しみを見出してくれるような改革を行っていききたいと思います。

（越谷市議会議員 山田 ゆう子）



統一地方選挙活動で感じたこと

今回の統一地方選挙活動では仕事や諸事情もあり、少ない時間ではありましたが戸別訪問、電話掛け、ポスター貼り、桃太郎（練り歩き）、開票立会人等を経験させて頂きました。

振り返ると選挙は結婚披露宴の様に感じています。候補者や政策をどの様に見せるかを考えて表現をすることは新婦を思わせ、街宣活動はキャンドルサービスを想像しました。

ただひとつ活動体験の中でわかったことは日常での人の繋がりが大切なことと思いました。活動報告チラシの配布や駅頭などをまめに行うことは特定の人達だけでなく、大勢の人達に考えを知って頂きその先にみんなが参加できる政治があるのかと思いました。

後、特に印象が深かったことは開票立会人でのことです。確認作業の際、候補者の名前が一枚一枚違う筆跡で記された投票用紙は世界で一枚しかないその人だけの表現で、期待や想いの詰まったものであり、だからこそ一票の重さを感じました。得票数の数字だけを見ていた時には感じられないものを感じました。

最後に今回の選挙は投票率が38.9%と低い中で無効票は1,479票あり、記号や皮肉で記した票や特に白票が大変多かったことには驚きました。わざわざ投票所まで自ら足を運び、無効票を入れることは沈黙のメッセージがあり、考えなくてはならないことだと思います。

（平方在住 小口高寛）

変わりゆく、時代と選挙

今回の統一地方選挙は、ここ10年前より「人」も「やり方」もかなり変わってきたとの印象を持っています。やっと日頃の「活動」が市民に評価される時がきたと思っています。

「かばん」「地盤」「看板」ということが言われてきましたが、確かに重要な要素ではありません。お金もない、手伝う人もあまりいない、選挙カーもないし、連呼もしない。しかし、当選した。

今までは、到底考えられない事が起こっています。言い換えれば、「選挙方法」が変わったのではなく「有権者側の選び方」が変化してきたのだと思います。一方変わらないものもあります。それは、「何を政策としてやりたいのか」という明確な「目標」です。

これなしでは、説得力がなく、ただ「お願いします」と訴えるだけの候補者となります。

例えば、「普段着で駅に立ち、ただ笑顔で市民にあいさつする」「選挙力1は乗るが連呼はしていない」「これは、普段の政治活動が前提であり、市民との「信頼関係」がなせる技ではないでしょうか。私は、新人候補者と一緒に行動していましたが、当初、事務所の雰囲気「暗い」感じていたが、手こたえを感じ始めた中盤以降、選対が明るさを取り戻し、候補者も手伝う方々も楽しく盛り上がり、若いも若きも「はつらつ」とした、いい感じになりました。当然、それは選挙活動にあらわれて候補者、支援者への「やる気」

となったのです。私は、千葉の新人（無所属）候補者の駅立ちも、参考のために見に行ってきました。びっくりにしたのは候補者はいなく、支援者だけで「演説」をしていました。「私は、何なにだからこの候補者を応援しています」という内容の演説をしていました。これはまさに候補者目線ではなく、市民目線ということではないのではないのでしょうか。時代はこのように「変化」していると感じています。「人は想像して、作って、また壊して、また想像する」と言った言葉があります。

最後に、人はどんな人でも「歴史」上に生きています。一人ひとりに歴史があり、日々歴史を作り出しています。投票はまさに「歴史」を創っているのではないのでしょうか。だからこそ、不満があるなら選挙に行きましょう。それで歴史を変えてみましょう。

（越谷在住 西岡 徹）

統一地方選挙の眠れる票

4月26日は、勤め先のある東京目黒も区議選でした。選挙結果は投票率39.35%、定数36人。自民13、公明6、共産5、民主3、維新2、目黒生活ネット1、無所属6となり、自民の半数を保守系無所属にすれば、ザックリ越谷市と同じです。私には、区政の焦点はハコモノと福祉予算の不足が、咬み合うことなく流れていたように感じられ、そのような所が越谷と変わらないなと思えて仕方ありません。

二千数百票が当選基礎票となっている地方選の支持基盤。眠れる六割の票をどう議会に繋げるか、私たちの活動に脇を締め、参加しなければならぬと思います。

（千間台在住 佐治）